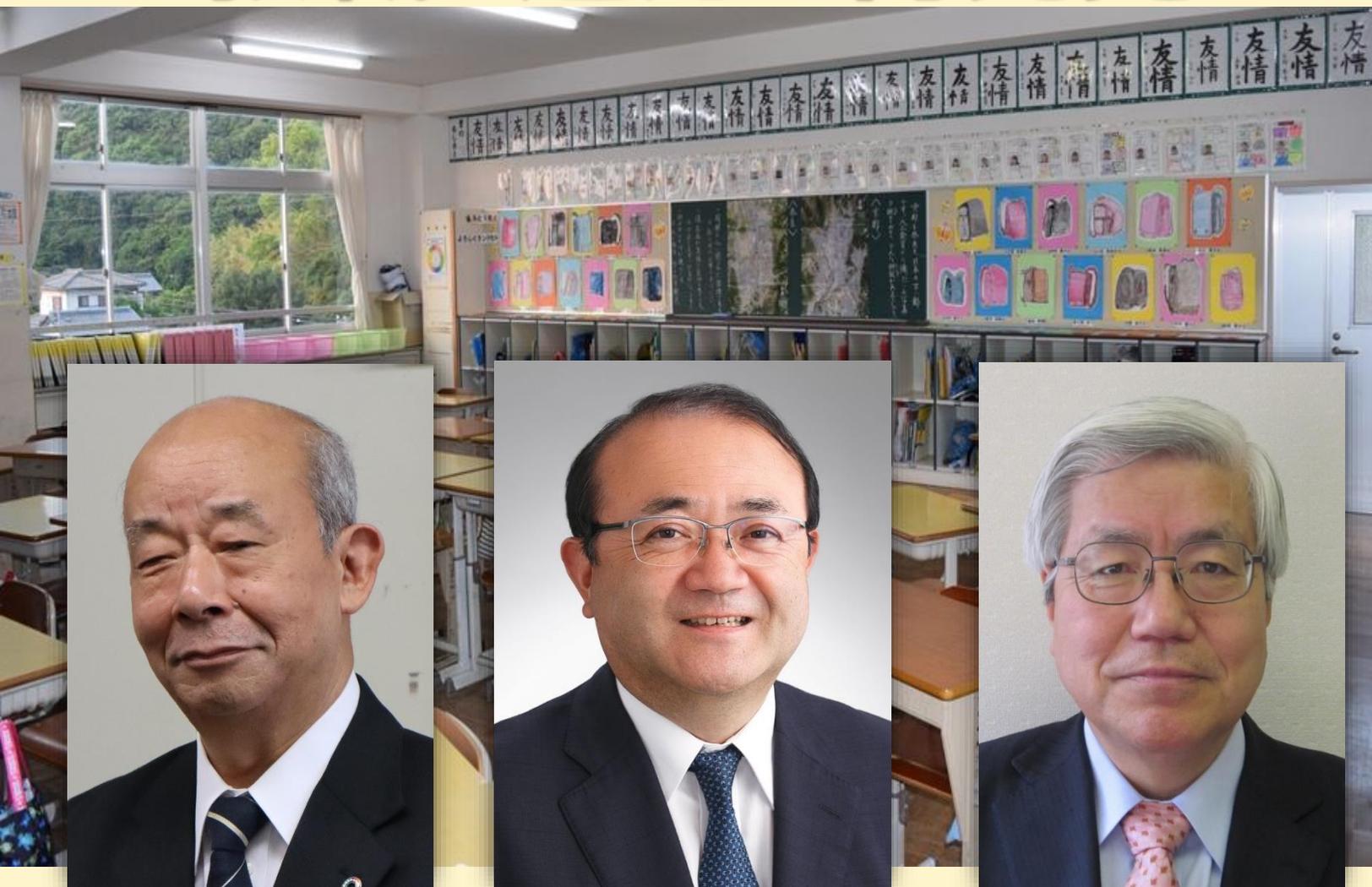


令和5年度 教育シンポジウム

崇高な使命を有する

教職の魅力を見出す



パネリスト
埼玉県戸田市教育委員会
教育長

戸ヶ崎 勤氏

パネリスト
公立学校共済組合理事長
元文部科学省文部科学審議官

丸山 洋司氏

コーディネーター
日本教育文化研究所所長
千葉大学名誉教授
千葉敬愛短期大学名誉教授

明石 要一氏

令和5年11月18日(土)9:20~11:50

お申し込みはこちら (申込締切11月13日)

<https://form.dr-seminar.jp/seminars/pxeajn/1118webinar>

配信方法 : Web配信 (全国どこでも参加可能)

参加方法 : 事前申込制、**会員以外の方も申込可能です**

連絡先 : kyoubun@ntfj.net 03-3262-1859



主催 日本教育文化研究所



登壇者提言

パネリスト 戸ヶ崎 勤 氏 プロフィール

戸田市教育委員会教育長

小中学校校長、戸田市および埼玉県教育委員会指導主事などを経て2015年より現職。

現在、第12期中央教育審議会委員。その分科会である初等中等教育分科会、教育課程部会、教員養成部会、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会等の委員や、文部科学省の「令和の日本型学校教育」を推進する地方教育行政の充実に向けた調査研究協力者会議の委員など幅広い教育カテゴリーの委員を務める。

着任以来、教育長就任時から、①AIでは代替できない能力やAIを活用できる能力の育成、②産官学と連携した知のリソースの活用、③3K（経験・勘・気合い）から脱したエビデンス重視の教育、④教育を科学すること、という4つのコンセプトを貫いた教育改革を推進している。

「崇高な仕事」である教職の新たな魅力～戸田市の教育改革の取組から～

子供と触れ合う喜び、担任や教科を任される喜び、子供の小さな育ちを日々実感できる喜びなど、これらの「教職の喜び」は現在の戸田市の教育改革のマインドセットであり、同時に、今後の教師にも是非受け継いでほしい教師の魂、つまり「師魂」であると考えている。150年の歴史に支えられた世界に冠たる日本型学校教育は、そうした「師魂」をもった教師一人一人の献身的な努力等によって支えられてきた。今後も、全人的教育等、日本型学校教育の強みを維持していくためには、本年8月の中教審の部会から出された、いわゆる「緊急提言」を受けての「教師の働き方改革のバージョンアップ」等、教育の在り方を進取と脚下照顧の精神等のもとに見直し、継往開来の考えをもって時代に即したものにしていかなければならない。そして、それは国や県だけに任せるものではなく、教育に関わる一人一人がアントレプレナー・イントレプレナーとなって、教育村・学校村の改革に取り組みねば達成できないと考えている。このことこそ、変化の激しい令和の時代において、新たな「教職の喜び」にもなると言えるのではないかと考えている。

「崇高な仕事」である教職のプライドのもとに進めてきた戸田市の教育改革の取組とそのマインドをお伝えするとともに、参加者の皆様とともに教職の魅力について考えていきたい。

パネリスト 丸山 洋司 氏 プロフィール

公立学校共済組合理事長

1961年大分県大分市生まれ。1983年文部省（現文部科学省）入省、

初等中等教育局長、文部科学審議官（2023.9退官）文部科学省参与などを経て現職。本組合は公立学校の教職員や都道府県教育委員会職員など約116万人が加入する、単一の共済組合としては国内最大規模。「生活の安定と福祉の向上」を目的に医療保険や年金給付等の事業を実施。全国のブロックごとに8総合病院を持ち、各都道府県教育委員会内に47支部、33宿泊施設を運営している。

地方財政審議会特別委員、公益財団法人文字・活字文化推進機構顧問、地方公務員共済組合連合会理事、公益財団法人スポーツ安全協会理事、その他国立大学法人や学校法人顧問等を歴任。モットーは「前向き、外向き、現場主義」

教育の核は教員であるが、教員に求められる役割も、従来の一斉方式の教え込みからファシリテーターとして、子供と伴走するスタイルへと変わっていく中で、我々が、崇高な使命を有する教職の魅力を考える時に、現下の長時間労働勤務や慢性的な教員不足という状況下で、何にどう取り組んでいくのか。精神疾患による病欠休職者が増大する傾向が続いている。育児休業取得者も増える中、教員不足の現状を嘆く教育委員会は毎年増大している。文部科学省の「公立学校教職員の人事行政調査」による精神疾患を理由に休職した教員数に病欠休職の者を加えると1万1千人を超える員数となる。文部科学省が指針で定めた超過勤務の上限を超える教員の割合は依然として高い状況にある。共済組合が独自に行っているストレスチェックサービス結果を見ても、「高ストレス者」は11.1%で厚生労働省が定める基準を上回っており、分析結果を見ると、「仕事に働きがい」は感じているが、量的及び質的な「心理的な仕事の負担」「自覚的な身体的負担度」のストレス度が高い傾向を示している。正に教員特有な傾向だといえる。教職員の健康管理と疾病予防を担当する本組合としても看過できない状況だと感じている。一方、全国の教員養成学部での教員採用者は学部定員の60%台である。学生は教職に対するやる気や熱意はあるが、それだけでは教職を選ばない。教職の仕事としてのやりがいは強く感じているが他の地方公務員、民間教育産業等の仕事を選択してしまう。なぜ学生は、教職を職業として、職場として学校を選ばないのか。このような状況の中で関係者は何から取り組む必要があるのか。教員の働き方改革や人材確保にとって何が重要で、何を優先して進めていくのか考えてみたい。

コーディネーター 明石 要一 氏 プロフィール

千葉大学名誉教授・千葉敬愛短期大学名誉教授。日本教育文化研究所所長。

昭和23年1月17日生まれ（山口百恵さんと同じ誕生日）、大分県姫島村出身。

東京教育大学大学院博士課程満期単位取得退学。専攻は教育社会学で青少年教育。

文部科学省中央教育審議会委員、同生涯学習分科会会長、千葉県地域訓練協議会委員、千葉県地域ジョブカード運営本部委員等を務める。千葉大時代に「ナガシマ学」を打ち立てる。

最新著「教えられること 教えられないこと」（2021、さくら社）

教師の魅力は何か、と問われたら教え子の成長である、と答える。教え子の活躍が教師冥利に尽きる。給料はそれほど高くない。社会的地位もそこそこである。教師の常識は「非常識」と陰口を叩かれる。それでもなぜ教職を目指すか。教師は「教育は国家百年の計」を推進するからである。教師は後世に残る人材を育てる役割を担っている。社会にとって極めて大切な職業である。

しかし残念ながら、ここ数年教職を目指す人が減っている傾向にある。教育学部の受験生が減っている。したがって、教職採用試験の倍率が3割をはるかに下回る都道府県が増えている。そして、精神的な体調不良のため休職や退職をする人も増えている。更に、担任をする人が減って、補充に苦労している教育委員会も出始めている。

シンポジウムでは、教職に対する「向かい風」に対して、どうすれば教職の魅力を取り戻せるか、考えていきたい。